
杏子の墓

きりもんじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

杏子の墓

【Zマーク】

Z0637E

【作者名】

きりもんじ

【あらすじ】

(ラジオドラマ) 放浪の旅から戻った若林治に手紙が来ていた。出発直後に幼馴染の柴山杏子が急逝したとの知らせだつた。ちょうど三回忌で旧友と墓参りをした。「杏子は若林君が大好きだつたのよ」「うそだ、そんな事一度も聞いたことがないよ」父親が現れて20冊の日記を手渡される。そこについづられた真実とは・・・?(きりもんじ)

三井の山の島（複数形）

この作品はラジオドラマです。読み聞かせしてよがよひしてお願
いします。

二年ぶりの広島

ボートのオールと波の音が単調に続く。
遠くで鳥の声。インド人たちの祈りの声が聞こえる。

(若林のN) 「柴山杏子さんお元気ですか？僕若林治は今、インドのベナレスにいます。ヒンズーの人々は朝早くから沐浴し、祈りをささげています。ゆつたりと流れるガンジス河には、

不思議に人の心を癒す魅力があります。ヒマラヤからの大自然の懷に抱かれて、母なるガンガでは安らかに死を迎えることができる。
ベナレスはそんな聖地でした」

ボートのオールと波の音がゆづくと遠ざかる。

カモメの群れる声。ポンポン船の音。

(駅員) 「富島口、富島口。富島行き連絡線乗り換え」

駅の雑踏音。

(若林のN) 「三年ぶりか。いい海の香りだ。
少しも変わってないな、牡蠣殻の山」

牡蠣打ちの音。婦人の語らい（広島弁）。

国道の車の音。音遠ざかりきえる。

砂利をふむ足音。玄関を開ける音。

(若林) 「ただいま」
奥から足音。

(母) 「お帰り治ちゃん。よう元氣で帰りんさつた。
はよ、あがりんさいや。お風呂わいとるけえ」

奥から父と弟の声。

(父) 「よひ、お帰り」

(弟) 「兄さんお帰り。すぐめじじやあや」

(若林) 「ああ、ただいま」

足音、奥く。

(父) 「ほつか。ドイツで事故ったんか」

足音、声奥く。

食卓の音。

(父) 「ビールじゅビールじゅ」

ビールを注ぐ音。

(弟) 「あー、はりへつた」

遠くで若林の声。

(若林) 「ええ風呂やつた」

(母) 「そこへ早よ座りんやー」

(父) 「ああ、乾杯じゅ」

(姫) 「おかえり、かんぱーいーーー」

ゴップのある音。飲む音。

(姫) 「ふう、頂きマース」

(若林) 「やつぱり牡蠣フライは最高」

(母) 「治ちやんの大好物じゅうひー」

(父) 「ほじでよのひ。せつきの話。ドイツの
アウトバーンでひっくつ返つてよう助かったのひ」

(弟) 「ほんまじやあや。はあ、死ぬかと思つたのひー」

声次第に遠のいていく。

(父) 「タイヤが取れた? ほりやたまげたの」
皆の笑い声が遠くに聞こえる。

(若林の父) 「お人よしの義父をはじめ、義理の弟も
皆、この3年間あまり変わっていないようだ」

遠くに声かすかに。

(若林) 「ああ、右の後ろのタイヤが外れて」
(父) 「よう助かったのう。あ、かあさん、灰皿」
(弟) 「わし、ちょっとトイレ」
(父) 「あ、わしもトイレ行って来るわ」

母の声が近づく。

(母) 「治ちゃん。実はこんな手紙がきとったんよ。
連絡の仕様がなくて・・・」

(若林) 「70年の12月か。旅立った年の暮れ、
インドにいた頃だ。・・児玉? 小学校の同級生の児玉から?
母さん、ちょっと海、見てくる」

II 沖縄の公島（後書き）

へい

幼馴染（前書き）

この作品はラジオドラマです。読みにこだわってお読みください。

幼馴染

砂利を走る音。国道の車の音。

(若林) 「電話ボックスはと、あ、あった」

ダイヤルの音。着信音。

(児玉の声) 「はい児玉です」

(若林) 「児玉か? 若林や。昨日帰ってきた」

(児玉の声) 「おお、若林! 生きとったんかいの? ハア死んだとおもつとつたがの」

(若林) 「何とか生き延びてる。とにかく柴山のことが心配」

(児玉の声) 「ああほりよ。お前に手紙を出したんじゃがの。急性の白血病での、入院して3ヶ月よ。葬式にやあ広島にお川合、土本と宮本さん増田さんが出席してくれたんじゃがの。

死に顔が綺麗での。あいつよう見たら美人じゅうたのひ。ほこのでの、柴山の親父さんがの、あの時・・・・・・・・・

読経の声が聞こえてくる。

(杏子の父) 「児玉わんですか?」

(児玉) 「え、あ、柴山のお父さん、このたびは」

(杏子の父) 「若林わんはお見えじゃないですか?」

(児玉) 「あいつ海外で、3年は帰つてこなか」

(杏子の父) 「そうですか。3年ですか・・・

3回同じ是非お会いしたいものです」

(児玉) 「なにか?」

(杏子の父) 「いやなに。杏子が小学校6年の時、若林君が一度我が家に立ち寄ってくれたことが会つて、彼の事はよく憶えているんですよ」

読経の声遠のき消える。

(児玉の電話の声) 「そつこいつ」とがあつての、ちょいぶりの20日が3回忌じやが、どうする? 墓参りするか?」

(若林) 「ああ、墓参りする。お前も何人か当たつてくれ」

(児玉の声) 「よしわかつた。柴山の親父さんにも伝えとくけえの」

電話を切る音。

(若林の...) 「柴山杏子とは小学校以来の幼馴染だ。中学高校と離れ離れになり、中3の同窓会で一度会つたきりで受験の時期を迎えた。

若林は京都の1期校に一度失敗し、一期校の伏見の学芸大に通いながら

翌年最後のチャンスをかけて毎日学内の図書館で受験勉強をしていた。

柴山が偶然この大学にいることに気付いてはいたのだが。
それどころではなかつた

幼馴染（後書き）

つづく

第三課口（複数形）

この作品はラジオドラマです。読みこへこでしようと願
いします。

テニスの音が続く。

(若林の声) 「一度だけ秋の夕暮れ時にテニスコートで柴山を見かけたことがあった。それはことのほか美しかったが、タブーな物をそつと眺めるようにコートの陰に隠れて見つめていた」

テニスの音遠のき消える。

(若林の声) 「12月にはじって追い込みに没頭していたある日、図書館で背後に人の気配を感じた」

(杏子) 「ひょっとして、あ、やつぱり若林君?」

(若林) 「あ、柴山さん。ひ、久しづり」

(若林の声) 「あのときの慌てよつたらなかつた。平静を装いつつ心臓は高鳴り心は動搖していた」

(若林) 「あ、とにかく外へ出よひ
本をたたむ音。立ち上がる音。

サッカー部の練習の声が近づく。

(若林) 「きょうは? 図書館?」

(杏子) 「ううん、もういいの。ちょっとと調べ物。もう帰るとい」

(若林) 「下宿は?」

(杏子) 「桃山南口」

(若林) 「桃山南口か。桃山御陵を越えてか。ちょっと恭ひつか」

(杏子) 「ええ、いいわよ」

サッカー部の声遠のく。

遠くで踏み切りの音。

(若林) 「残念ながらまた不合格だった。今の僕には話と話せる資格がないよ」

(杏子) 「また来年も受けるね」

(若林) 「ああ、親との約束なんだ。最後のチャンス、もうほんとに疲れきったよ」

(杏子) 「どうしても、そこじゃなきゃダメなのね?」

(若林) 「男の意地つて奴。一度決めたことだから。男のプライドつて厄介なものだ」

(杏子) 「ほんとね」

時々車の通る音。

(若林の声) 「あの日は心の動搖を隠すべく一方的に一人でしゃべり続けていた。杏子にはさぞかし迷惑だっただろう」

近くで踏み切りの音。

(若林の声) 「とうとう口が暮れて、下宿の前まで来てしまった。それでもしゃべり続けていた。突然玄関の戸が開いて

玄関の戸が開く音。

(下宿のおばさん) 「中に入つて一階のお部屋でお話を」とお茶もつて行つてあげるから」

(杏子) 「ありがとうございます、おばさん」

階段を上がる音。

(若林の声) 「清潔で簡素な部屋だった。小さなテーブルを挟んでさしむかい、正座して足がしごれてきた。来年、受かつても落ちても日本を飛び出して海外放浪の旅へ出る決意を述べて、あとは何を話したか

さつぱり憶えていない。足が限界に達し、意を決して部屋を出た。
なんとも氣恥ずかしい思いしか残っていない。それから3ヶ月が過ぎて」

桃山商口（後書き）

ひづへ

旅立ち（前書き）

この作品はラジオドラマです。読みこへこでしようと頼
いします。

旅立ち

合格発表風景。遠くで万歳の声。

おめでとうの声。胴上げの歓声。

電話のダイヤル音。着信音。

(父) 「ようがんばったの一。合格おめでとう。

ほこじや一十歳になつたことじやし、約束どおり

大変じやうひつけど自活してみいや」

(若林) 「ああ、がんばる

電話を切る音。

再びダイヤル音。「一ルが続く。

(若林) 「・・・ま、いいか

電話を切る音。

(若林の二) 「その日の夜」

電話のダイヤル音。着信音。

(下宿のおばさん) 「杏子ちゃん今、教育実習やり

バイトやらで忙しそうやで。手紙書かはつたら

(若林) 「もうですね。どうもありがとうございました」

(若林の二) 「あのあとすぐには手紙をかけなかつた。それからは入学手続き、寮の面接、アルバイト探しと猛烈に忙しくなり、学園紛争が始まつて年の暮れにやつと手紙を出した

デモの騒乱の音。

(デモの声) 「安保粉碎！闘争勝利！」（繰り返し）

(機動隊マイクの声) 「ジグザグを止めなさい！直ちに止めなさい

！」

(アジテーションの声) 「われわれはー、大学当局ノー、今回の決定をー

断固実力でー、粉碎しー・・・・・」

デモの騒乱が遠のいていく。

(若林の声) 「デモを横目に見ながら、朝晩とアルバイトにあけくれた。

幸いこの1年、学園はバリケード封鎖され、試験はすべてレポートになつ

ていた。杏子からの返事もなく、連絡もつかず、多忙の中、いまさら幼馴染

でもあるまい、と忘れかけていた。何よりも海外出発準備が最優先だつた。

・・・・・・・・・・・・そして「

ドラの音。霧笛の音。

カモメの声。螢の光。

人々の別れの声。霧笛。

音が遠のいていく。

(若林の声) 「出発前の年の暮れにもう一度杏子に手紙を出した。旅先から必ずたよりを出すと書いて。しかし、この出発の3ヵ月後に

杏子は急逝するのだ

カモメの群れる声。

遠くでポンポン船の音。

(駅員) 「広電宮島。広電宮島。松大船乗換え。

一番線から広島駅行きがまもなく発車します。

「乗車の方はお急ぎください」

(車掌の声) 「広島駅行き発車します」

扉の閉まる音。

(若林) 「ふつ、またあつた」

電車の動き出す音。

(車掌) 「次の停車駅は地御前、地御前」

走る電車の音。

(若林の声) 「この電車で6年間、毎日瀬戸の海をながめながら広島まで通学した。ほぼ1時間で町の中心に着く

電車の止まる音。

(車掌) 「ええ、天満屋前です。白島線は向い側。ほりあい。乗り換えてください」

旅立ち（後書き）

つべ

墓参り（前書き）

この作品はラジオドラマです。読み聞かせでしようと頑
いしま。

交差点の雑踏の音。

(富本) 「若林君、おひさしふりー。」

(若林) 「ああ、いんにちわ。富本さんか?」

(児玉) 「よひ、今田が平田じゅうえの、わしと富本さんしか来れんかつたんじや。すぐれいじやけえー5分あつやいけるよ。」

横断歩道渡る声

「ひ

横断歩道の信号音。

車の音。雑踏。足音。

(児玉) 「やこの角を曲がるんじや」

雑踏遠ざかり消える。

小鳥の声。三人の足音。

自転車の鈴。

足音だけがゆっくりと響く。

(富本) 「杏子は若林君のことが大好きだったの」

(若林) 「え、うそだよそんな事。一度も聞いたことないよ」

(富本) 「ほんとよ。小学校の6年の時、皆誰が好きって言っついた時。あの無口な杏子が最初に若林君つて言ったのよ」

(若林) 「うそだよそんなの。本人から一度も聞いたことないよ」

(富本) 「当たり前でしょ。本人を前にしてそんなこと言えるわけがないでしょ。それでその時、若林君のどこが良いので聞いたら、死んだお兄さんことでもよく似てるからって言つたのよ」

(児玉) 「へー、初めて聞いたのう、杏子に兄貴がおったんじゃ」

(富本) 「そり、ひとつ上の兄さんだったんだけど、その前の年にこくへしてゐるのよね彼女。病氣だつたらしいんだけど」

(児玉) 「そりこやあ、なんとなく兄弟みたいじゅつたのうめ前り」

(若林) 「そんなことなじよ」

砂利道を3人が歩む音が続いている。

(富本) 「ねえ、憶えてる? 私が若林君に手紙渡したこと?」

(若林) 「忘れたよ、そんな事」

(富本) 「柴山さんのこと好きですか? つて書いて渡したじゃない? 憶えてない?」

(若林) 「憶えてない...」

(富本) 「彼女、返事がなくて落ち込んでたわよ」

(若林) 「知らないよそんなこと。だつて好きとか嫌いとか、分からなによ小学生じゅ。わつ、いきなり立ち止まるなよ」

(富本) 「若林君ーじゅ、今はどうなの?」

(若林) 「むむ、いや、それは、それこそ妹みたいで、ちゅつと太めだけど何と書つか嫌いじゃないし、どうひらかと言うと好きだったかも?」

(富本) 「ほら見て御覧なれー。はつせつと欲しかつたのよ彼女。その一言で幸せに死ねたのに。男つてほんとに鈍感なんだから」

(若林) 「そんなバカなーちゅつと待つてくれ。それじゃまるでこの俺が悪者みたいじゅないか!」

(富本) 「そりよ。女の気持ちも分からぬ、無神経で

わがままなあなたが彼女を不幸にしたのよー。」

(若林)「そりやひどいよ。どうしてそういうことが分かるんだよ。勝手に決め付けると俺だって怒るよー。」

墓参り（後書き）

つべ

木村の父（繪書家）

この作品はラジオドラマです。読みこころでしようと願
いします。

杏子の父

ゆうべつと歩き出す。

(富本) 「私のかつてな決めつけじゃないわ。
彼女が入院した時お父様から若林君の居所
分かりませんか?連絡つきませんかと訊ねられたの。
あなたの実家にも連絡して秋口に海外へ飛び出したきり
全く連絡がつきましたとのことだったわ。ねえ児玉君?」

(児玉) 「ほうよ。ほんまじやの一。会いたがつたんじやの一」
(富本) 「やうよ。ほんとに会つたがつていたのよ」

(若林) 「分かつた。どうも俺が悪かつたような気がしてきました。
それで、なにかな?杏子は何をいおうとしたのだろうか?」
(富本) 「若林君、あなたつてほんとに鈍感ね。言つんじやなくて、
言つて欲しかつたのよ。たつた一回」

(若林) 「ひとつ?」
(富本) 「やうよ。好きだつて」
(若林) 「そんなこと。(おどけ) こぐらだつて言ふるよ。
好きだ。好きだ。好きだ。ほら?」

(富本) 「やうじやなくで。心を込めて。一回でここによ」
(若林) 「よくわからないなあ」
(富本) 「だから男は鈍感つて言つのよ」

足音がつづいてくる。
(児玉) 「あ、この寺がやうじや」

砂利道の足音。

水道、手桶に水を入れる音。

(児玉) 「畠本さん花もつてえや。若林、この手桶、ほれ。
わしゃ線香に火点けるけえの。右の一一番奥のところへんじや。
柴山で書いてあらひ」

砂利の足音。手桶の音。

(若林) 「あれ、この新しいの違うみたいや」

(児玉) 「ああけむた。その新しいのんは去年亡くなつた
お母さんのじやねつ。真ん中が杏子の墓。一番奥のんが
兄さんのじやねつ」

(畠本) 「やうよ。今はもうお父さん、お店を閉めて
お一人で暮らしておられるやう」

墓石に水をかける音。

(児玉) 「やあ三人で祈ろうか」

(若林) 「ああ」

(畠本) 「ええ」

小鳥のさえずり。

静寂が続く。

砂利をふむ弱々しい足音が近づいてくる。
足音止まる。

(杏子の父) 「ここにちわ」

(若林の父) 「男の人の声に振り向いて驚いた。

そこには今にも倒れそうな白髪の老人が、重しつ

な包みを持って立っていた

(三人) 「いんこちわ」

(杏子の父) 「よく来てくれました。あなたが若林さん
でしょう?これを渡さないかんかったのです。娘の
形見ではありますが、この日記と手紙だけはあなたに
お渡します。どうか、受け取ってください」

包みを渡す音。

(若林) 「え、あ、はい」

杏樹の父（後書き）

つづく

手紙（前書き）

この作品はラジオドラマです。読み聞かせしてもらいたいと思います。

手紙

(杏子の父) 「これでひと安心だ。杏子は、小学校の5年生の頃から日記をつけ始めました。ちょうど息子が亡くなつてからの事だと思います。それからほぼ毎日、死の一週間前まで書かれています。私も何回となく読み返しました。特にあなたに関する記述の所は赤い糸ヒモを日印にしておきました。後半あなたのことが増えてきています。特に急性骨髓性白血病が発症してからの3ヶ月間は、狂おしいまでにあなたのことがつづられています。私も後わずかの命ですから、この日記と手紙を持つしていても仕方がありません。どうか必ず一読なさつて、用が無くなれば焼却してください。

よろしくお願ひします」

(若林) 「はい、かしこまりました。必ず最後までじっくりと読ませていただきます」

(若林のZ) 「Iの時初めて杏子の父はかすかに笑みを浮かべた

カモメの群れる声。

遠くでポンポン船の音。

(駅のアナウンス) 「広電宮島。広電宮島。松大船乗換え」

砂利をゅつくり歩む音。

(若林のZ) 「実家の自室で包みを広げた」

包みを広げる音。

(若林の声) 「20冊の大学ノート。一番下は古めかしく一番上は真新しい。赤い糸紐が上のほうに集中している。

若林治様と書かれた封筒3通と柴山杏子様と書かれた封筒2通。海外からの航空便が1通。なつかしいなあ。あのあと大変だった。あれつ、あの時のだ。出発前のもちやんと届いていたんだ。なに

も知らずに俺は。返事もきちんと書いてあるじゃあないか?何故出せなかつたのだろう?切手も貼つてあるのに」

手紙を開ける音。

(若林の声) 「若林さん遅くなりましたが
杏子のナレーションが重なつてくる。

(杏子の声) 「念願の合格おめでとうござります。去年の暮れ、桃山御陵の坂道を歩きながら、若林さんは一生懸命話してました。今僕には君に合づ資格がないんだとか、世界に必ず飛び出すんだ

とか、自分の使命は何なのかとか、とても難しいお話を何度も繰り返しておられました。下宿に上がつてもうつてから、卒業したらどうするの?と聞かれて、登町小学校の先生になろうつと思つたの

答えた時、若林君はとても喜んでくださいました。その後が变了よ。君のテニスは天使のよつだ、涙が出るほど美しい、て言われたのを憶えていますか?思わず私が吹き出したので気分を

害されたのでしょうか?すぐ帰られましたね。「めんなさい

手紙（後書き）

つべ

ヒナ（繪畫類）

この作品はラジオドラマです。読みこへこでしようと願
いします。

(若林の乙) 「何故出でなかつたのだろう。ついで、
その頃の田畠を見てみれば分かるはずだ」

ノートをめくる音。

(杏子) 「切手を貼つておれでよし、ヒ」

階下で電話の音。音止む。

(下宿のおばさん) 「杏子ちゃんー電話ー。」

テレビの音が聞こえている。

(杏子) 「(階上から) はーー」

階段を下つむ音。足音奥へ。

(杏子) 「(奥で) もしもし・・えつ、分かりました」

足早に足音近づく。

(杏子) 「(不安げに) おばさん」

(おばさん) 「どないしたん?」

(杏子) 「母が倒れたので今すぐ広島へ帰ります」

(おばさん) 「せつやたいへんや。はよかえり」

発車のベルの音。

(駅のアナウンス) 「三番線より広島行き夜間特急富島が発車いた
します」

夜行列車の単調な音が続く。

(杏子の乙) 「資格でなんでしょう。人と人とのふれあいの中で、

資格つて何なのですか？人を好きになつたり愛したり、あるいは愛されたりするのに資格がいるのでしょうか？私に会う資格がない

とおしゃるのは、きっと若林さん自身のプライドとの戦いなのでしょうね？よく考えてみればあまり大した事のない些細なことでも、その人にしてみれば大きな大きなとげなのでしょうね。時が来ればとげは跡形もなく嘘のように消滅してしまうかもしません。最近、私の心と体の中の小さなとげに気付かされました。小さなとげならそのうち自然に消えていく。悪いとげなら、もしかして毒を持つたとげなら、必ず私を食いつぶしてしまいます。このとげを持った人間には人を愛する資格も人に愛される資格もないのでしょうか？いつか若林さんに確認してみよつ

踏み切りの音。列車の音がずっと続いている。

(車内アナウンス)「まもなく終点広島です。山陽本線くだりは1番ホームから着陸行きます……」

アナウンスの声遠ざかり消える。

(若林の声)「杏子は母親が退院するまでの1ヶ月間広島にいた。父の食事の世話をしながら毎日看病に通つた。結局その年の暮れも正月も杏子は広島にいたのだ。だから、手紙はそのままになつたのか

近づく足音。ノックの音。

(杏子)「はい」

(婦長)「柴山さん、ご機嫌いかがですか？今日退院ですよ」

(杏子と母)「ありがとうございます」

(婦長) 「もりもり食べてもらつと元気になつてください」

(母) 「はい、もりもり食べます」

みんなの笑い声。

ヒガ（後書き）

つづく

激痛（前書き）

この作品はラジオドラマです。読みこべりでしようと頑
いしまや。

激痛

(若林の父) 「やの晩の」とある
スキヤキの煮える音。

(杏子) 「もうお肉大丈夫よ、おかさん」

(母) 「あーここにおこ。はよつこんなんが食べたかったんよ」

(父) 「せよつ食べんかこ、食べんかこ。美味しいものをいつこと食
べて

きちんと薬を飲み続けときやあ、もつ発作は起きると先生が「いつと
つたひづ」

(母) 「ほつよね。あの発作の時には背骨にズキンときて立つとか
れんのよ」

(父) 「体力と精神力でお母さんは乗り越えられるー。
みんなの笑い声。

(母) 「杏子、はよ京都に戻らにやいけるのじやねつ」

(杏子) 「やう。期末もあるし、いよいよ四年生。卒論と教育実習
で大忙し」

(父) 「もう4年生か」
(母) 「来年卒業、はやくもんよね」
(父と母) 「小学校の先生、はははは
で大忙し」

声、遠のいていく。

(杏子) 「つまくいけば登町小学校」

(母) 「あほうね、ははは」

(父) 「頑張りや杏子。後は大丈夫やけえ」

(杏子) 「うん。もう疲れたから寝るわ。おやすみ」

階段を上る音。声近づく。

(杏子) 「ふう、疲れた。ぐつすり眠ろ」

布団を敷く音。

(杏子) 「よいしょっと。わー、かわいいパジャマー・
父が買つてくれたんだ」

時計の秒を刻む音。

寝息がかすかに聞こえる。

(杏子) 「むむん」

寝返りをうつ音。

小さく心臓の鼓動が聞こえる。

小さな衝撃音が走る。

(杏子) 「ううん(つなされる)」

心臓の鼓動が高まる。

衝撃音が走る。

(杏子) 「キャッ!」

布団をめぐる音。

鼓動さらに高まる。

大きな衝撃音が走る。

(杏子) 「キヤツ! 助けてー・背骨が・・・」

布団から這い出す音。

柱にすがりながら立ち上がり立てる音。

二階からの杏子の声。

(杏子) 「キャーー助けてーおとーさんー・・・背骨が

大きく倒れる音。

(父) 「うん? なんだ? やすー・せよ「ひー」・」

飛び起きて一階へ駆け上がる音。

(母) 「(不安げに) キョ「ひー」・・・・・」

激痛（後書き）

つべ

夢（前書き）

この作品はラジオドラマです。読み聞かせでしようと願
いします。

救急車のサイレンの音。

走る救急車内の音。

(隊員の声) 「背中が痛いといって倒れたやつです。ビリビリ

(無線の声) 「意識はありますか?..ビリビリ」

(杏子) 「(苦しそうに) はあ、はあ、はあ、」

(父と母) 「・・・・ わよひー」

サイレンの音遠ざかり消えてこへ。

診察室の音。

(医師) 「ふむ」

椅子の回転音。

(医師) 「急性貧血ですぐ退院でありますよ。看病疲れかな?」

(母) 「じめんね杏子。私のため」

(杏子) 「ここのおお母さん。すぐ良くなるから。

私のほりいわ、じめんなさい」

椅子の回転音。

(医師) 「あ、念のため検査で3日間入院していただきます。

そのあとすぐ退院、間違いありません。じゃ、お大事に」

(若林の声) 「杏子は予定通り3日で退院した。」の間杏子は次のよつた夢を見ていた。

”白衣を着た若林医師が駆け込んでくる。杏子のベッドでひざまずき田をつむつて眠っている杏子の手をとり必死で、

『悲観的になつてはいけない！君は必ず助かる。すぐ元気になつて退院できるから頑張るんだ杏子！』

そこで杏子は田を開けて笑いながら思い切り抱きつく。
唖然としている若林医師。

とこつ夢だ。楽しそうな字で田記に書かれていた。この頃か？
杏子が、自分が抱えるとげの正体を本能的に自覚し始めたのは。
その後一人とも多忙になつた。12月に入つて出発日が確定し
手紙を出したが、その返事もきちんと書かれていた。教育実習
も卒論も終了し、後は登町小学校の採用通知を待つだけだと書
いてあつた。・・・・・何故出さなかつたんだろう？
「田記を見てみた」

(杏子のノ) 「12月になるとひょつとしたらと思つていた
ところへ、若林さんからの手紙が届いていました。私には
直感で分かるのです。えいって指を鳴らすとポストに手紙が
入つて輝いていたんですよ」

(若林のノ) 「その1週間後」

(杏子のノ) 「もう手紙は出さないことに決めました。

若林さんは返事を期待していない。住所も不安定。3年間も
旅に出るなんてもつてのほかだわ。せつせと忘れて私も頑張りつ

(若林のノ) 「その後の田記は最後の真新しいノートになつていた。
杏子は心機一転、新生活の戦いを開始したのだ」

夢（後書き）

つづく

森内先生（前書き）

この作品はラジオドラマです。読みに来て下さいがよろしくお願
いします。

杏子先生

小鳥のさえずり。

授業開始の鐘の音。

(杏子) 「みなさん、おはようございますー。」

(トビ也も達) 「おはようございますー。」

(杏子) 「先生の名前は」

黒板にチョークで書く音。

(杏子) 「しばやまきよひー。せよひー先生ですー。」

(トビ也も達) 「わー、きよひー先生ー。」

拍手の音、遠ざかり消える。

(若林のこ) 「その年の夏は以上に暑かつた」

カモメの群れる声。ドリの音。霧笛。歓声。

船出の音遠ざかる。

(若林のこ) 「横浜からナホトカまで船。シベリア鉄道でハバロフスクへ出てイリュージンのジット機でモスクワまで36時間。秋口、凍えながらストックホルムに着いた。

ヒッチハイクでデンマーク、ドイツと南下してミュンヘンからイスタンブール行きの国際列車に乗った。バスを乗り継いでやつとの思いでイングランドにたどり着き、ベナレスで1ヶ月、

いろいろとものを考えさせられた。よし、ヨーロッパへ戻つて働く意を決した時、ふと柴山杏子のことを思い出し、手紙を出して12月、イングランドを後にした

ヤハのなく声。

(杏子の声) 「あの年の夏は異常に暑かつた。2学期が始まつても30度以上の猛暑が続いていた」

(杏子) 「あいづえお、はいー。」

(子ども達) 「あいづえおー。」

(杏子) 「かきくけー、はーー。」

(子ども達) 「かきくかーー。」

心臓の鼓動が急速に高ぶる音。

激しい衝撃音。

(杏子) 「ああつ」

倒れる音。

(子ども達) 「あよづせんせーーー。」

一斉に立ち上がる椅子の音。

救急車のサイレンの音。

隊員の声。ストレッチャーの音。

あわただしい数人の駆ける音。

(杏子) 「(あえぎながら) 若林さん助けて。若林さん助けて
ストレッチャーと足音遠のく。

遠くでサイレンの音。

(杏子の声) 「三日前に私はまた倒れた。この1年発作は全く
起きなかつたのに。体の中で毒のとげと生きる命とが戦つてゐる

点滴の音が单调に響き続けている。

(杏子の声) 「救急車の中で若林さん助けてと叫び続けていたそ
だ、

恥ずかしこつたらありやしない・・・・・・・・・(寝息)」

杏子先生（後書き）

つづく

入院（前書き）

この作品はラジオドラマです。読みにくいでしきょうがよろしくお願ひします。

入院

心臓の鼓動が単調に続く。

小さな衝撃音。

(杏子) 「ハハ」

再び心臓の鼓動が続く。

小さな衝撃音。

(杏子) 「ハハ」

寝返りをうつす。

心臓の鼓動が高まる。

大きな衝撃音。

(杏子) 「キヤッ。助けて!」

駆け足音近づく。

(婦長) 「柴山さん!大丈夫?」

(杏子) 「大丈夫じゃありません。助けてください。
背中にズキンと来るんです。とても怖いんです」

(婦長) 「よしよし分かった。今先生が来るからね。
我慢するのよ柴山さん。背中をすつてあげるから、ほい。
我慢するのよ」

(杏子) 「ハ・・・ハハハ(泣く)」

(杏子の声) 「今日は長引きそうだ。あの苦しい検査が続くのか
と思つと気が重くなる。子ども達はどうしてるのかな?」
遠くで子ども達の声。

(子ども達) 「さよならせんせーーー!」

(杏子の父) 「今日は転院になつた。検査が前の時より厳しい。医師の対応も微妙に違つ。もう、助からないかも?」

遠くで父と母の声。婦長の声。

(婦長) 「今日はお元気そうですよ」

(父) 「そりやじつも。せんまじや。ははは、元気やひじや。かあさん果物」

(母) 「起きとるとな杏子? ハア顔色がよくなつて。これ食べないけんよ」

(杏子) 「あらがといへ、おかあさん」

紙包みを開ける音。

(父) 「今日は元氣やひじやの、杏子」

(杏子の父) 「父の表情がさえない。何か私に隠してくる。父は何かを知つていてる。気丈に振舞う父と母。見舞いに来てもまともに顔を見れない。必死で笑顔を作つてゐる」

点滴の音が単調に響き続ける。

杏子の寝息。

心臓の鼓動が徐々に高まる。

するどい衝撃音。

(杏子) 「キヤツー」

跳ね起きる音。

(杏子) 「(大きな息遣い) ふつ、ふつ」

(杏子の父) 「薬で今までの発作が薄められてその分毎日ズキンと来る。」

とても背中が痛く背骨が熱い。助けて若林さん。一人で死ぬのがとても怖い」

入院（後書き）

つづく

私をお嫁さんにしてください（前書き）

この作品はラジオドラマです。読みにっこりしようがよろしくお願
いします。

私をお嫁さんにしてください

ブザーの音。あわただしい足音。

(婦長) 「柴山さん発作。モルヒネ用意して」

(看護婦) 「はい」

(婦長) 「先生は?」

(看護婦) 「すぐ来られます」

駆ける足音。ドアを開ける音。

ベッドのきしむ音。

(杏子) 「痛い痛いとも背中が痛い。助けて若林さん！
助けて！何も悪いことしないのに。なにも・・ああ、痛い痛い」

(医師) 「そつち抑えて。もつと強く。そり、そのまま。モルヒネ
ー。」

(婦長) 「はーー。」

(医師) 「少しレベルを上げよ！」

ベッドの音静まつていぐ。

(医師) 「もう、かなりきびしひな

足音が遠のいていく。

(杏子の声) 「私は絶対若林さんのことが好き。退院したら
結婚して欲しい。早く帰ってきて。プロポーズしてあげるから」

(若林の声) 「この頃から発作が頻繁に起き、モルヒネの量が
増えて、杏子は狂おしくなってきた」

(杏子の声) 「さようは私達家族でピクニックに行つての夢を見
ました。小学生の子どもが一人、もちろん登町小学校の生徒ですよ

ブザーの音。

(婦長)「柴山さん発作！」

駆け足音が遠のいていく。

(杏子の声)「痛い痛い。夜中も眠れません。体中が痛くてどうじよつむありません。今若林さんはどのあたりを旅してるんですか?お便りください。

3年間は長すぎます。約束しましたね、お便り待っています」

ここから心臓の鼓動が不気味にリズミカルに響いてくる。衝撃音が一定の間隔を置いて徐々に大きくなりながら入る。

(杏子の声)「痛い痛いほんとに痛い。体中の骨が酸に侵されるみたいですね。

父も母も涙を一杯ためて見守ってくれています。私はいつも必死で笑顔を作つてきました。もうこの痛みには耐えられません。父母が帰ると私は思い切り叫びます。

『死にたい！殺して！早く殺してーーー』

心臓の鼓動と衝撃音がリズミカルに流れている。

(杏子の声)「とげの毒が体中を回っています。生きる命の力が負けそうです。

若林さんの力を信じています。時々ふと我に帰つて痛みが全くない時があります。

(狂おしく)必死で手紙を書きましょう！私が愛した人は若林治君

！大好き！

私の先生なんですよ。両手で私の手を握り締めて、がんばれ杏子！
お前は僕の妻だ！

結婚しよう！かつこいい若林君。賛成の方手を挙げてください。学
級委員の若林君

大好きです！私をお嫁さんにしてください」

私をお嫁さんにしてください（後書き）

つづく

ペナレス（前書き）

この作品はラジオドラマです。読みにこでしょうがよろしくお願ひします。

ベナレス

鼓動と衝撃音が大きくなり少し早まる。

(杏子の声) 「12月に入りました。きっと手紙が来ます。絶対来ます!私は直感で分かるのです。えいっと指を鳴らすとポストに手紙が入つて輝いているんですよ」

鼓動と衝撃音さらに早まる。

(杏子の声) 「手紙はまだでしょうか?間違つて京都に送つたのでは?広島の住所は知つてははずなのに」

鼓動と衝撃音急激に高まる。

(杏子の声) 「もつだめ!私死ぬ。手紙はまだですか?必ず来ます。絶対来る!父に噛み付きました」

鼓動と衝撃音、最高に達する。

(杏子の声) 「ああ、もつだめ。何がなんだか分からぬ。手紙来てるはずよーお父さん見てきてー」

鼓動と衝撃音ぴたりと止む。

遠くから駆ける足音が近づいてくる。
声が近づく。

(父) 「(大声で) 杏子ー若林さんからの手紙が来てたぞー」
手紙を開ける音。

(父) 「ほり、若林さんからの航空便だ!」

(若林のZ) 「父に支えられ必死に起き上がる杏子。もう視点が定まらない。

手に持とつとするが持つきれない。父、しつかりと封筒を杏子の手に握らせ、

手紙を読み始める。杏子は無表情で耳を傾けてくる

(父のZ) 「杏子さんお元気ですか?僕は今イングのベナレスにいます。

ヒンズーの人々は朝早くから沐浴し祈りをささげています

(若林のZ) 「父が杏子に分かるかと確認している。
杏子はかすかにうなずいた」

ボートのオールと波の音が単調に続く。

遠くで鳥の声。

インド人たちの祈る声が聞こえる。

(若林のZ) 「杏子さんお元気ですか?僕は今イングのベナレスにいます。

ヒンズーの人々は朝早くから沐浴し祈りをささげています。12月
でも30度

を越える蒸し暑さです。昨日この河を上る観光ボートに乗つてみま
した。

濃い深緑色を帯びた流れは非常にゆつたりとしていて、ビームでも
神秘的で

奥深いガンジス河そのものでした。ボートから見えるガートと呼ば
れる階段は

所々途切れていて白い砂地になっています。何ヶ所か木組みの上に
死者を白い

布に包んで荼毘に付しています。中にはとても小さいものもあります。
淡い煙が曇天の空に昇っていきます。

ベナレス（後書き）

つづく

ガンガ（前書き）

この作品はラジオドラマです。読みにくいでしきょうがよろしくお願ひします。

ガンガ

死者は必ず一度聖なるガンジス河にじっくりと浸してから火をつけられるので、白い灰になるまでに相当時間がかかります。その間家族は荼毘の周りで祈り続けるのです。白い砂地に見えたのは数千年に及ぶ死者の灰の集積だったのです。インドの人々は親しみをこめてガンジス河のことをガンガと呼びます。家族は灰をこのガンガに流します。ボートから流れに手を入れてすぐつてみました。白い粉が確かに手のひらに残ります。上流まで何箇所もこういう場所があります。きっとこの深いとうとうと流れるガンガの底は、無数の骨と白い灰とで幾層にも重なっていることでしょう。

ベナレスの町には全国から死者が担ぎこまれてきます。白い布に包まれて、色とりどりの花に飾られて、家族総出で担いできます。

ここには、死を待つ人々の無料の館があちこちにあります。死を覚った老人や不治の病の人たちが家族のもの何人かと数年暮らすのです。ある晩裏通りに迷い込んだことがあります。何かの祭りの夜でした。

京都の地蔵盆のような子どもの祭りです。じつと見とれていたら、僕の脇にとても美しい少女が立っていました。黒髪で小麦色の肌、瞳が大きく澄んでいてびっくりしました。杏子さんにそっくりでした。みんなと

遊ばないのと田で示したら、アチャヤとか言つて可愛く首をかしげるのです。

向こうの家からお母さんしき人が出てきました。イングサリーのよく似合ひ若いお母さんです。中に入れと手招きしています。少女は僕の手

を掴んで引つ張りました。お母さんもにっこり笑つてアチャヤと首を傾げています。ナマステと言つて館の中に入ると、ベッドにおじいさんが横たわっていました。枕元でおばあさんが編み物をしています。にっこりと微笑んでくれました。閑散とした部屋にテーブルがひとつ、少女が座れと合図をします。座ると少女はちよこんと僕の横に座つて何かを待つています。やはりミルクティーのチャイとお菓子が運ばれてきました。

少女はとてもうれしそうに僕を見上げます。お母さんの話では、この先何年でもおじいさんが亡くなるまでここに面おさつです。じいちゃんのようによく本人も家族もそれが一番幸せなのだと言つてました。

ガンガには不思議に人の心を癒す魅力があります。ヒマラヤからの大自然懷に抱かれて、母なるガンガでは安らかに死を迎えることが

できる、

ベナレスはそんな不思議な聖地でした・・・・・』

ガンガ（後書き）

つづく

木村の書（複数形）

この作品はラジオドラマです。読みこころでしようと願
いします。

杏子の墓

(杏子の口) 「死んでしまうと私の体も灰になつてガンジス河の底深く沈んでいくようです。白い衣に包まれた私のなきがらは少し重たそうです。綺麗な花一杯に飾られて前を父が後ろを若林さんが

抱いています。太くて重い私のなきがらにはなかなか火がつかずに父は困っています。やつと火がつき母と三人で私が真っ白な灰になるまで祈り続けてくれました。・・ありがとう、若林さん。

告白します。私の人生で心の底から好きだったのは、若林治さん、あなたひとりでした・・・・・・」

荼毘の燃える音。

遠くに鳥の声。

しばらくの静寂。

間近に小鳥のさえずり。

(若林の口) 「すまなかつた杏子。ほんとに鈍感ですまなかつた。・・・・・・最後の封筒には柴山清三郎と書いてあつた」

封筒を開ける音。

(父の口) 「若林治さん、杏子はもう字が書けなくなりました。血液のガンと骨のガンとが体全体に転移して医師は一ヶ月と宣告しましたが、若林さんの手紙を信じて三ヶ月生き通して

くれました。手紙を受け取った後、幸い脳と神経が先に侵されて痛みはずいぶん和らいだようです。時々意識が戻るとまた手紙を

読んであげました。一週間後、最後に若林さんの名をかすかに叫んで、娘は微笑みながら眠るよつに亡くなりました

カモメの群れる声。

遠くでポンポン船の音。

(駅のアナウンス) 「一番線から広島駅行きが発車します」

扉のしまる音。

電車の動き出す音。

(車掌) 「次の停車駅は地御前、地御前」

電車の走る音。

走る音遠ざかっていく。

電車の止まる音。雜踏。

(車掌) 「白島線は向こうです。乗り換えてください」

車の音。雜踏。横断歩道の音。

音、遠ざかり消える。

砂利道を歩く足音。

足音とまる。

水道の音。手桶の音。

砂利道を歩く音。

歩く音止まり、墓石に水をかける音。

小鳥のさえずり。

(若林) 「杏子。今なら言える。心の底から言える。
お前が好きだ。・・・・・・・・・『じめん』

-
完
—

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0637e/>

杏子の墓

2010年10月9日12時06分発行